



新潟県 支部 報

'82年4月20日

No.13(冬・春)

(財) 日本野鳥の会新潟県支部

私のフィールド

キバシリとブナ林

北魚小出町 柳 瀬 昭 彦

はじめて見て、すぐ図鑑と一致する野鳥というのはいさぐさ多くはない。ブッポウソウなんかはすぐそれと解った。

白い腹、褐色と白、黒のしま模様、ブナの樹幹を廻りながら登るしぐさ — キバシリ、一目で解った。探鳥歴10年目の出会いである。ところは浅草岳叶津コースのブナ平、1981年10月12日のことである。

浅草岳 — 私はこの山に20数回登って76種の鳥を観察した。探鳥会の記録にあって私のまだ見えていないコサメビタキ、オシドリ2種を加えると、この山の鳥は78種に達する。中には比較的観察の機会の少ない種類も多い。マミチャジナイ、アカショウビン、ミヤマホオジロ、ヤマセミ、コノハズク、アオバト、そしてこのたびのキバシリ。

しかし、これらの観察例の多くは、この山の福島県側に属する。なぜかという、新潟県側は稜線を境にきれいにブナが伐り倒されているのに対し、福島県側は田子倉コースにせよ、入叶津コースにせよ、ブナの原生林がよく保存されているからである。

北魚沼郡の湯之谷村の平ヶ岳は近年急速に人々の人気を集めているが、山頂付近の美しさに対して、樹林の保存状況は山麓部で極めて悪い。人の体にたとえるなら胸部から下は



キバシリの棲む林 (撮影 小池重人)

素裸に近い。すぐ目の前の屋瀬、燧岳の広大な福島県の樹海を見るにつけ新潟県人として顔の赤らむ思いである。

近く県北、飯豊のあの大樹海にも斧が入ると聞いている。林業も大切ではある。しかしブナの巨木をチップにし、それから紙をつくるというのなら考える必要がある。野鳥の会員が先に立って紙の無駄使いを反省する学習をし、キャンペーンを張り、なぜ自然を保護しなければならないかを訴えてゆかねばなるまい。

キバシリとの出会いの興奮を胸におさめながら、こんなことを考えながら私は下山した。

第1回中級指導員養成講座に参加して

上越市 山本 明

日本野鳥の会員が1万人を越え、非会員を含めて探鳥会や自然観察会の参加者が年々増加してゆく中で、この面での指導者の確保と質的な向上をめざして、本部主催のこの講座が昨秋11月2泊3日の日程で開かれました。

(「野鳥」82年1月号11頁参照) 本県支部からは、新潟の白井康夫さん、高橋秀恵さんと私の3人が参加してきました。以下その概況を、感想を加えて報告します。

まず基調的な面で、事務局長の市田さんから「世界の自然保護と日本」について、歴史、意義、現状、展望、国際団体と国際協力・条約、日本の関係法規などの解説をききました。研究部の塚本さんは「環境教育論」を講義され、これは理念的かつ理論的なものでしたが、ともかく今や地球的な規模で環境を促え、それに関心を持ちそのために努力する人間を育てる必要を強調されました。

次に「日本野鳥の会の現状と今後」について常務理事の川崎さんから、また支部運営法について埼玉県支部副支部長の池谷さんから、会員700名を越える同支部のこれまでの組織づくりや運営活動について報告されました。更に3日目に再び市田さんが支部活動のあり方について話されました。これらはこれからの支部運営の面で参考になりました。

探鳥会運営法は、この講座の中核となったものでしたが、指導部の小河原さんを中心に事業部の藤本さん、常務理事の高野さんが担当されました。内容は、探鳥会の役割と問題点、準備と当日の運営、自然の取扱い方と捉え方、探鳥年間プログラムの作成(演習も行った)、ビギナー指導法などでした。基本的なことから具体的な面まで、これまで実施した成果や反省をふまえて、詳しく講義されました。(この一部は「野鳥」82年1月号

に「より楽しい探鳥会を求めて」と題して掲載されています)

これまでの探鳥会のあり方を見直し、参加者が本当に満足して楽しい思いをもって帰るよう、創意ある運営をしてゆく必要を痛感しました。特に次の点など今後の探鳥会や自然観察会の指導・運営に当っては、充分心してゆかねばならないと思います。

- ・指導者(リーダー)は、鳥の識別屋で終わってはならない。(単に出現した鳥の種名を教えるだけであってはならない。)
- ・ビギナーを大事にする。特に種類だけ多く教え込まない。(経験者と分けて指導する)
- ・鳥の生活、生態、民俗などもできるだけとり入れて指導する。
- ・事前の準備(下見、ポイントの設定、配布するパンフなど)を充分に行い、当日の運営に万全を期す。必要によってリーダーの打合せも行う。
- ・参加者にも発言や活動をして貰うよう気を配る。(一方的な説明だけにしない)
- ・リーダーは基本的に環境保全や自然保護の姿勢を貫いて指導する。(抽象的な生の押しつけはよくないが、少なくとも最初の集合時に動植物をみだりに捕獲・採集しない注意は必要)
- ・リーダーは不断から常に研さんを積んでおくことは勿論、当日の体調も整えておく。(前夜の飲み過ぎは禁物)

この講座で2日目と3日目の朝、6時半からの朝食前、明治神宮の森で探鳥会の実技指導がありました。東京支部が毎月1回行っている神宮の森探鳥会(多い時には200人以上の参加者とか)の実績をふまえて、藤本さんが指導に当たられました。ここは人工の造成林ですが、面積が広いだけに大都市の中と思われにくいくらい、鳥の種類と数が多いのです。

2日目の朝、オオタカが現れたのには一同びっくりして喜びました。

2日目の夜は、全国から集まった参加者と講師（本部職員）一同、一室で車座になって飲み交し、交流を深めました。

今回の講座は1回目ということもあって、本部職員が講師となり講義が主で、やや一方

的だった感はありますが、参加者にアンケートもとりましたので、今後2回3回と開催されてゆくうちに改善され、より充実した講座となることでしょう。またブロック単位の開催も考えられています。本県支部会員の方々も、今後できるだけ多数参加されるよう希望する次第です。

勉 強 会 後 記

柏崎市 小林 高 臣

10/24～25の両日、昨年に引き続き講師をお招きして、柏崎市自然休養管理センター内「米山山荘」において、勉強会が行われました。

講師は、本部指導部主任、小河原孝生氏、新潟支部からは、風間辰夫氏にお話をお願いし、「渡り鳥の標識調査」について風間氏の豊富な経験談の中から、専門的な御講演を、また、小河原氏からは、ウトナイ湖サンクチュアリー、大井野鳥公園などが完成するまでの、さまざまなエピソードを、スライド、映画を交えて、楽しく、流暢にお話し下さいました。

あいにく当日は、台風並みの風雨で、参加者の皆さんは、たいへんだったと思います。

しかし、こんな悪天候にもめげず、総勢30名が集い、広い会場は熱気に包まれ、両講師の熱心な、そしてユニークなお話に、聞き入っていました。日頃から野鳥保護に貢献されている両氏のお話で、現状では回避し得ない問題がたくさん存在することを知らされ、保護という面において、これから我々が積極的に取り組んでゆかなければならないことも、また、多数存在しているんだ、ということをも新たに認識せざるを得ませんでした。



会の活動を支えてゆく上で、探鳥会は重要かつ本質的な行事のひとつであることは、言うまでもないことですが、それと同様に、こうした勉強会の必要性もまた、大切なひとつのファクターとして、今後、更に重視してゆかなければならないことではないでしょうか。

何はともあれ、初日の講演、懇親会は、夜遅くまで続きました。

プログラムでは、翌日、柏崎・恵田2級ステーションにおいて、早朝から標識調査の見学が予定されていたのですが、前日のあらしが次の日まで尾を引き、標識調査は中止されました。しかし、朝食終了後、頸城の朝日池での探鳥に出発。風雨の中の探鳥にもかかわらず、ここで見たヒシクイの壮観な飛翔を覚えおられる方も少なくないと思います。

当日は、ミサゴ、チュウヒを含め、37種観察されました。

カイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、コサギ、アオサギ、ヒシクイ(500)、マガモ、カルガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、ミサゴ、トビ、チュウヒ、オオバン、ケリ、タゲリ、ツルシギ、ユリカモメ、アジサシ、キジバト、アオゲラ、モズ、ウグイス、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、スズメ、ムクドリ、ハシボソカラス、ハトブトカラス

現地（朝日池）解散で、第2回勉強会は、無事終了しましたが、惜まれるのは、天気さえよければ……。ということだったと思います。

コムクドリの育雛のようす

—上川村 小池 重 人—

コムクドリは新潟県には4月頃にやってきます。私の調査している新潟市の海岸の松林では4月中旬から5月上旬にかけて多くの個体がわたってきます。そして前もって架けていた巣箱に5～6月に営巣し、1回だけ雛を育て各地に分散していきます。

ここでは、1978年と1979年の調査に基づいて、雛が孵化してから巣立つまでの育雛期間についてお話しします。

産卵されてから12～13日するとまっさおな卵から4～6羽のまる裸の雛が孵ります。巣によっては1羽が1日遅れて孵るので、大きさが少し違います。昼間は給餌のためにいそがしくなるので雛をあまり抱かなくなりますがそれでも孵化直後は雄も雌も抱いています。夜間は雌がしばらくの間抱いていますが、雛の羽毛が生えそろうてくるとやらなくなります。雄は夜間抱きません。雛のふんのしまつや巣箱内の清掃は雄も雌も行います(図1)。

巣内雛への給餌については、6月10日から18日にかけて3つの巣箱で、餌を運んできた親鳥の写真を撮って調べました。それらの中には孵化後7日から14日の雛がいました。

それによると291回の給餌のうち、雄は147回、雌は144回運び、そのうち餌が動物か植物か判別可能なものは247回で、動物171回(69.2%)、植物76回(30.8%)でした。



図1 雛のふんをくわえ出す雄親



図2 グミの実をくわえてきた雌親

動物質の種類はアワフキムシ、ガガンボの成虫、ガの幼成虫とサナギ、ワラジムシ等でしたが、種類が識別可能でない場合も半数以上あり、量的なことは良くわかりませんでした。運ぶときは1匹ずつとは限らず多いときは3～4匹まとめてくわえてきます。

一方、植物質では76回中全て果実で、クワ43回(56.6%)、キイチゴ14回(18.4%)、ヒョウタンボク11回(14.5%)、グミ5回(6.6%)、ツタ3回(3.9%)でした(図2)。しかし、クワの実の場合は1回に2～3個一緒にくわえてくることがありましたが、グミ、ツタの実は1個ずつくわえてくるし種類によって大きさが違うので、回数がそれぞれの果実の絶対量を表すわけではありません。また、もう少し時期が遅ければヒョウタンボクの実がもっと多く熟するので、それらの割合は変化するでしょう。それに6月上旬の頃はサクラの実も運んでいるらしく、巣によってはその実の種子が多量に吐きだされてきました。この種子を吐きだすことは他にもグミやヒョウタンボクでも見られ、巣立った後には産座の上に雛によって吐き出された種子がたまっていることも稀ではありません。

孵化した日の雛はその日のうちにすぐチーチー鳴き、頭を上げて口をあけ餌をねだります。体の外側は全て肉色で口の中は黄色、上



図3 孵化後8～10日の雛

嘴よりも下嘴の方が長く上嘴には突起がついています。目はあかず、丸裸で部分的に灰色の綿毛がついています。1日後は外見は初日とほとんど変わりませんが、少し腹が大きくなって孵化初日の雛と区別できます。2日後になると、ようやく羽毛の出る部分、特に翼が出る部分に黒いものが見えてきます。4～5日後、多くの雛でサヤ毛が翼に出てきますが、目はまだあきません。6～7日後になると、チチッ・チチッと断続音も出すようになり、この頃から半目や目をあけたりするものが増えてきます。8～10日後は羽毛のサヤ毛が筆毛になり始め、大部分が目をあけます

(図3)。11～13日後、体全体の筆毛が伸びて開き、全身をおおい始めます。また上嘴の外側も基部や先端が少し褐色味を帯びてきます。生長の早いものは尾羽がすでに1～3cmくらいになっています。14日後～、この頃になると巣や雛によって生長差が著しく、早いもので全身羽毛でおおわれますが、遅いものではまだ筆毛が残ります。巣立まじかな雛は雌の成鳥より少し白っぽいが非常によく似ています。

雛が巣立つまでの日数を育雛日数といいます。ここでは育雛日数を最初の雛が孵化した日から、最初の雛が巣立った日までの日数としました。1978年と1979年で確認した28例のうち最も早く巣立ったのは15日で最も遅かったのは22日でした。そして、最も普通だった日数は18日で28例中13例(46.4%)を占め

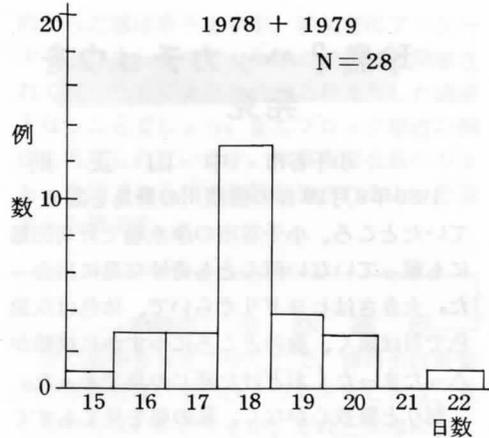


図4 育雛日数(最初の雛が孵化してから最初の雛が巣立つまでの日数)

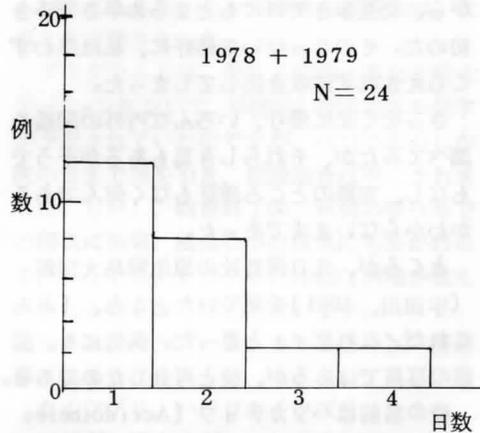


図5 巣立に要した日数(同じ日に全て巣立った例を1日とする)

ていました(図4)。

一方、最初の雛が巣立ってから最終的に全部の雛が巣立つまでに要した日数(全て同じ日に巣立った日数を1日とする)は1～4日で、1日から4日の順に12・8・2・2例でした(図5)。

雛が巣立ってからは、雄も雌も雛を養います。しかし、巣立った巣には二度ともどらずに散らばっていきいます。10月上旬になるとコムクドリの姿はほとんど見られなくなります。

珍鳥？ハッカチョウを 発見

小千谷市 中山 正 則

1980年8月29日に信濃川の野鳥を調査していたところ、小千谷市の浄水場で野鳥図鑑にも載っていない何んとも奇妙な鳥に出会った。大きさはヒヨドリぐらいで、体色は灰黒色で目は黒く、胸のところにかすかに横線が入ったまったくおどけた感じの鳥であった。

割りと警戒心がなく、私の姿を見てもすぐに逃げようとしなくて、最初に見つけた場所に居留まったままであった。2、3分も達つと口をアングリと開け黄色い口中をのぞかせながら、交互歩きで目にもとまらぬ早さで歩き初めた。そのこっけいな格好に、私は思わずこらえきれずに吹き出してしまった。

さっそく家に帰り、いろんな内外の図鑑を調べてみたが、それらしき鳥もあるがそうでもなし、実際のところ確証もなく何んであるかわからないままであった。

ところが、先日保育社の原色飼鳥大図鑑(宇田川、1961)を見ていたところ、「ああこれだ！これだ！」と思った。偶然にも、図鑑の写真ではあるが、彼と再会したのである。

彼の名前はハツカチョウ (*Acridotheres critateiius*) といひ(別名カアレン)、漢字では八哥鳥と書く。繁殖地の中国中部及び南部・台湾・香港・ベトナム・ラオス中部では留鳥であり、ビルマ東部でも観察される。また、マレーシア(ペナン)・フィリッピン(マニラ)・カナダ(バンクーバー)では移入された個体が繁殖し、帰化している。

我が日本には、江戸時代から飼鳥として輸入されてきたが、その数は余り多くないという。私が観察した個体は、個人もしくは動物園から逃げ出したものか、はたまた台湾に生息しているものが何にかの拍子で北上したものか、それとも本当に繁殖しているものかは、



king, B., and E. C. Dickinson. (1975) より

本人に聞いてみるよりも仕方がない。

ハッカチョウは、全国各地でしばしば観察されているそうである。高野伸二氏も埼玉県入間川を始め何度か観察されているそうである。

英名はクレストッド・マイナといひ、その名前のおりムクドリの仲間で主に人家に営巣しているという。カナダ等の例のように輸入されたものが繁殖定着化していることでも分かるおり、本種はかなりそれに類似した環境があれば順応できる種と考えられる。他のマイナの類・北米のホシムクドリの異常な環境適応能力から知られるように、ムクドリ類は人為的な影響に強く、人間の勢力の伸長とともにその分布域を拡大している種が多い。これからすると、私の見たハッカチョウが、たとえ飼育していたものが逃げ出したものとせよ、パートナーを得、我が日本に棲みつく可能性がないともいえない。

ともあれ、我がハッカチョウ君よ、今どこにいるのですか。元気だったら、またお会いしましょう。

文 献

- King, B., and E. C. Dickinson. 1975. Birds of SE Asia. Collins, London
宇田川竜男. 1961. 原色飼鳥大図鑑. 保育社

探鳥会の結果報告

冬の海辺の探鳥会として4回目の寺泊探鳥会は、2月7日寒風吹きさす天気ながら沢山の海鳥類を観察することが出来た。寺泊港は昨年の今頃、工事の為巨大なクレーン船が湾内の至る所で動いていたが今年は工事も終わった様で静かな湾内であった。いつもながら地元で知られる竹内 武氏には寺泊町役場の教育委員会の会議室を無料で借りていただき感謝に絶えません。参加者からも大変なことだけど冬の探鳥会はこれからも寺泊で続けて開催していただきたいという声が多かった。主な鳥としては、クロガモ、ビロードキンクロ、ハジロカイツブリ、オオセグロカモメ、セグロカモメなどで、じっくり観察することができた。



(確認した鳥)

ハジロカイツブリ、マガモ、カルガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、ウミアイサ、トビセグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ユリカモメ、ウミネコ他36種。

ガンカモ類の調査結果について

昭和55年の全国支部長会議の決議を受けて、本会の第1回ガンカモ、ハクチョウ類全国一斉調査が昭和57年1月15日に行なわれました。これは水鳥保護のための新しい全国調査であり、毎年継続して行なう予定です。新潟県では例年、新潟県野鳥愛護会が県内の各地域ごとに調査を行なっており全国でも例がない程

すばらしい内容です。今回は県支部でも初めてのことであり、新潟県野鳥愛護会、日本野鳥の会県支部、同佐渡支部が協議し、合同で調査をいたしました。県内約50ヶ所にも及び新たためてその広さにおどろいた次第です。

調査にあられた皆さんに心からお礼申し上げます。調査報告書はさっそくとりまとめ、はなはだ恐縮ですが県内の20ヶ所にしぼって本部野鳥の会に報告しましたので御了承下さい。今後ともよろしくお願い申し上げます。

通信・おたよりコーナー

◎私は現在ウトナイ湖サンクチュアリにボランティアとして来ています。一面が氷の世界、遠くではオオワシの雄大な姿が見られます。

(上越市 岩島裕子)

◎すっかり春の気配となり、ツバメが渡来し、ウグイスが4月2日にさえずりました。これからは探鳥に録音にと私の楽しい季節がやって来るこのごろです。(糸魚川市 伊藤卓夫)

◎東蒲原地方も今年は例年になような少雪で春も今がたけなわ。アトリの群れ(100羽位)やマヒワの群れが毎日観察されます。ツバメは3月29日に初認。(津川町 渡部 通)

◎春の気配が日増しに濃くなって来ました。全国大会が長野県戸隠高原で開催されると聞いて楽しみにしています。県支部でもツアーを組んで参加されてはどうか。

(新津市 渡辺範雄)

◎日本野鳥の会全国大会のお知らせ

- 1) 期日：1982年6月5日(土)～6日(日)
- 2) 会場：長野県「戸隠森林植物園」
- 3) 経費：7,000円
- 4) 申込締切：5月10日
- 5) 他：新緑の戸隠は文字どおりの「野鳥の楽園」です。クロツグミ、コルリ、ホトトギス……の大合唱。水辺ではミズバショウとクリソウが色どりを添えています。ぜひ御参加下さい。

図 書 紹 介

◎東蒲原郡の鳥類～加藤忠一著

本会前支部長の加藤忠一氏が長年にわたってフィールドノートに集積されていた記録をまとめたのが本書の特徴です。東蒲にすむ数多くの野鳥の生態を知らせてくれるにとどまらず、自然保護、鳥類保護を通じて人間保護をも教えてくれる貴重な資料です。ぜひ御一読下さい。申込は県支部事務局へ。定価 800 円です。

新 入 会 員 の 紹 介

- 203 鈴木 孝 940
長岡市寿 2 丁目 5 - 15 B 45 号
- 204 長谷川平三 950-21
新潟市小針西 1 丁目 9 番 20 号
- 205 吉田勝仁 950-23
白根市大字大郷 1708
- 206 小柳健一 959-15
南蒲原郡田上町川船河甲 891
- 207 相田克也 951
新潟市旭町 2-5241 NHKあさひ寮 13 号
- 208 高橋小夜子 950
新潟市新石山 3 丁目 17-1 えりか C 307 号
- 209 山田伸一
十日町市駅前通 ファッションパルク内
- 210 高内千香子 950-21
新潟市東青山 1 の 16 青山荘 412
- 211 井口智彦 950
新潟市東中野山 2 丁目 15 番 21 号
- 212 篠田聰史 959-26
北蒲原郡加治川村相馬 307

- 213 梶原 正 959-21
北蒲原郡水原町若葉町 5 - 4
- 214 清水大伍 950-21
新潟市小針 1018 の 6
- 215 川端 豊 951
新潟市文京町 25 番 61 号
- 216 江上明利 950
新潟市南万代町 11 の 17 朝日荘 101 号
以上の方が新入会員となりました。新潟県へ初めて転勤して来られた方もいらっしゃるようです。気がるに鳥だより、写真、イラストなど事務局へお寄せ下さい。探鳥会でお待ちしております。今後ともよろしく願います。

住 所 変 更 の お 知 ら せ

- 岩島裕子 (新) 〒942 上越市栄町 2-8-14
- 小野絹子 (新) 〒333 川口市芝中田 1-21-18
- 佐々間百合 (新) 〒950-21
新潟市寺尾台 3-11-5 八代栄荘 17 号
- 五十嵐敏行 (新) 〒950-21 新潟市坂井 2266-5
- 永井 武 (新) 〒950 新潟市山木戸 3-2-8
- 小川耕市→布川に (新) 〒959-28
北蒲原郡黒川村大字東牧村宮住宅 42 号
- 武井恒美 (新) 〒950-22 新潟市中橋寺字三倍 2981 の 1 コーポ飛鳥 D 号

▶ 編 集 後 記 ◀

大変お待たせいたしました。私の不手際のため遅くなってしまいました。深くおわび致します。これからは探鳥に最も良い季節です。お体に気をつけられ、楽しい観察をお続け下さい。
(小池)

発 行 昭和 57 年 4 月 20 日
発行所 (財) 日本野鳥の会新潟県支部 編集 小池 重 人
〒 959 - 44 新潟県東蒲原郡津川町三郷乙 1193 番地
電 話 02549 (2) 5045 渡 部 通 方 (禁、無断転載)
振 替 新潟 1 - 6002